

本当の教えに出遇うことは「生きる」ことから、「生かされる」ことへの大転換

無碍の一道 第57号

発行:2017年9月6日
発行者:淨土真宗本願寺派 長尾山 天龍寺
副住職 天野英昭
〒739-0147 東広島市八本松西6丁目10番1号
TEL・fax(082)428-0160・(082)428-1360

秋彼岸法座

日 時 9月19日(火) 9:00~15:00頃

朝席 9:00~11:30 暮席 13:00~15:00

ご講師 長岡 正信 師(呉市 西岸寺ご住職)



第71回歎異抄輪読会

日 時 9月21日(木) 19:00~20:30頃

ご講師 松田正典先生(広島大学名誉教授)

費 用 500円

参加者 天龍寺の門信徒の方のみならず、どなたでも参加は自由です。

仏壮大からのお知らせ

★天龍寺佛教壮大年会 月例会 9月30日(土) 19:00~20:30

磯松天龍寺墓苑並びに磯松天龍寺墓苑合同墓合同参拝のお礼

今年も8月12日(土)の18:00から磯松天龍寺墓苑にて合同参拝をさせていただきました。また、大変暑い中、お忙しい中、今年も昨年同様、多くの方のご参拝をいただきましたこと感謝申し上げます。さらに過分なるお供えも頂戴しました事、重ねて感謝申し上げます。

父も高齢(89歳)となり、今年は家内の兄(島根県高林坊住職)・息子と私で法要を務めさせていただきました。祖父・父から私、そして息子・孫の代へと変わっていくと思いますが、これまで同様に、磯松天龍寺墓苑・磯松天龍寺墓苑合同墓参拝を継承させていただければありがたいと思う事もあります。

遠くは東京・千葉・鹿児島県等、なかなかご縁をいただく事が難しい方々ともこの様な法要を通してご縁をいただきます事は、この点もありがたい事だとしみじみ感じる事あります。

天龍寺佛教壮大年会の方々へ感謝申し上げます。

8月1日(火)の盆法座の前の7月下旬には、本当に暑い中、当山の裏山をはじめ境内地の草刈りをしていただき、さらには8月下旬には、この時も本当に暑い中、当山の庭の砂利の整備も含め、庭をきれいにしていただきました事、書面をお借りしまして感謝申し上げます。

還暦を迎えるに当たり、しみじみ思うこのごろです。Ⅱ



「隨縁」の言葉の如く、日々のご縁に私なりに従って生きていかなくてはならない存在であるとも

思う事です。一方で、^{しやば}婆の如く、歯を食いしばって耐え忍んで生きて行く境涯であるとも実感することです。

また、以前、当山にご関係をいただいております方が、「天龍寺さん。それぞれにこの世で果たさなくてはならない『業』を果たし終えないとお浄土には還してもらえないよ。」と言われた事がありますが、この言葉も還暦近くになりしみじみ実感をすることあります。

30代半ばの私なりの挫折感・絶望感は、よい意味でそれまでの生きて来た価値観が大きく変わりました。先般、電通にお勤めであった新人の女性の方が、残念ながらこの世を去られました。マスコミで、「働くために生きているのか。生きていくために生きているのか。分からなくなった。」等と報道されました。30代半ばの私も、一時期、トラック競技の選手の如く、もの心がついた時から、私なりにただひたすらに走り続け、走り終わったら人生終焉ではありませんが、生きるために生きているのか等と考えていたこともあります。

一方で、先生に輪読会の中で、ゲーテの言葉を引用され「絶望を知ってはじめて人間となる。」とご教示をいただいたことがあります。その言葉をいただき、私なりに救われた事がありました。

さらに安田理深師が、「浄土真宗のみ教えを深く味わうには、苦労することだ。」とあるところで、お話をされたそうです。この点も甘いですが、私なりの苦労が、浄土真宗のみ教えを私なりに深めさせていただくご縁となったことです。

この厳しい現実を生きて行く事は、言葉には表現できないほど苦しみ・辛さ等があると考える事です。親鸞聖人が、「苦海」「難渡海」と表現されていますが、歳を重ねるごとにこの言葉も私なりに重みを持ってきています。

歎異抄の前序に「まったく自見の覚悟をもって他力の宗旨を乱すことなけれ。」と書かれています。現代社会は、知性・理性中心主義であり、さらに今後人間は知性・理性等にさらに磨きをかけて行くと個人的には思っています。一方で利便性・効率性等を加速的に追求し、人間の物質的な欲求（幸福？）を希求していくと考える事もあります。

しかし、冷めた言い方になりますが、それらの人間の知性・理性等で考える事は、例えばIPS細胞の創造、人間臓器の創造、AI（人工知能）の創造等、突き詰めて考えますに「この一度の人生をより長く・より快適に・より物質的に豊かにしていく手段・方法にすぎない。」と偉そうに考える事もあります。

仏教では、人間の不安・恐怖の中で一番大きなものに「不活畏」があります。この意味は、「明日食べていけるだろうか。将来食べていけるだろうか。」しかし、この点も冷めた言い方になりますが、「食べていっても死を迎えます。」

※（先般の安居会の法座の資料を無碍の一通第56号に続けて掲載させていただいております。ご理解をいただきますことお願い申し上げます。）